

過去のいじめ経験が大学生に及ぼす影響

— 当時のいじめ経験と現在の援助要請に着目して —

金子 功一

植草学園大学発達教育学部

本研究は、大学生 117 名（男性：31 名；女性：86 名）を対象に、過去のいじめ経験に関する質問紙調査を行った。研究Ⅰでは、過去のいじめ経験を振り返り、当時のいじめ状況と援助要請との関係について調査した。その結果、いじめられた経験は全体で 6 割、いじめた経験は 4 割と比較的高く、いじめられた経験がある者の中で、いじめられて体調を崩した者は 2 割いることが明らかになった。また、いじめられた経験がある者について、援助要請を行わなかった者が 15%いることが示された。そこで研究Ⅱでは、過去のいじめの影響を長期的に捉え、いじめの影響が大学生である現在の援助要請にどのような影響を及ぼすかについて検討を行った。その結果、いじめの否定的な影響である「情緒的不適応」は援助要請回避型、及び肯定的な影響である「他者尊重」は援助要請自立型と過剰型にそれぞれ有意な正の影響を与えることが示された。

キーワード：過去のいじめ経験，大学生，いじめの影響，援助要請

1. はじめに

本研究は、大学生における過去のいじめ体験を把握し、当時のいじめの影響性と現在の援助要請との関連を明らかにすることを目的としている。援助要請という問題解決に結びつく手段との関係を検討することは、いじめ問題の深刻さを明示する意味で社会的意義があると考えられる。

文部科学省の調査(文部科学省, 2016)によると、平成 28 年度の小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は 323,808 件であり、前年度の 224,540 件より大幅に増加していることが報告された。また、いじめ防止対策推進法(2013)の施行に伴い、いじめの定義が「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校(小学校, 中学校, 高等学校, 中等教育学校及び特別支援学校)に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものを含む。)

であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と改められ、いじめの防止に対する学校が講ずべき対処方法が明確化された。ただし、坂西(1995)は、いじめを定義したとしても、からかいやけんかと明確に区分できるものではなく、軽い気持ちでのからかいが、深刻ないじめに変化することもあると指摘している。確かに、このようないじめの防止に向けた様々な取組がなされているものの、有効な手立てが見出されていないのが現状である。さらに、いじめ経験による影響は長期的に身体的・精神的に否定的な影響を及ぼす可能性も示唆されている(坂西, 1996; 香取, 1999)。そこで、いじめられた個人がいじめの解決に向けて自分自身でどのように援助を要請していたかが大切であると考えられる。

個人が問題を抱えた際、それを自分自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求めることは重要な対処方略であり(永井, 2013)、こうした対処方略のことを援助要請と呼んでいる

(De Paulo, 1983)。しかし、文部科学省 (2016) は、児童生徒を対象に調査し、いじめられた際の相談状況について「学級担任に相談」は 77.7%、「保護者や親等に相談」は 23.9%である一方、「誰にも相談していない」は 6.6%であると報告している。また、中桐・岡本・澤田 (2008) は、いじめられた経験のある 127 名の大学生において、いじめられた際にとった対処行動の中で、誰にも相談しなかった者は 26.0%であることを明らかにしている。さらに、深谷・深谷 (2003) は、大学生 1326 名を対象に、小中高時代に体験した「いじめ」について質問紙による調査を行った。その結果、いじめにあったときに「相談した」者は、男性が 42.2%、女性が 63.1%であり、男性よりも女性の方が「相談した」ことを示している。これらの知見から、いじめられた際の援助要請の特徴として、他者に援助を求めない者が比較的多くいること、また男性よりも女性の方が援助要請を行うことが考えられる。

援助要請の用い方に着目した研究については、援助要請を個人のスタイルとして捉え、様々な要因との検討が行われている (永井, 2013)。永井 (2013) は、心理的問題への援助要請スタイルを自立型、回避型、過剰型の 3 タイプに分類している。自立型は問題を独自で解決できない場合にのみ援助要請をするスタイル、回避型は援助要請を避けて自身で問題を抱え込むスタイル、過剰型は些細な問題でも援助を要請するスタイルをそれぞれ示している。しかし、先行研究において、いじめの影響を長期的に捉えた上で、大学生における現在の援助要請スタイルへの影響性を検討した研究は見当たらない。いじめの影響が深刻な場合は、他者への不信感が高まることで無力感に陥り、援助要請を行わなくなると考える。

そこで本研究では、研究 I と研究 II に区分して、研究 I では、大学生を対象に、過去のいじめ経験をいじめられた場合といじめた場合に分けて振り返り、いじめを経験した時期や内容 (方法) の実態を把握すること、及びいじめられた後の体調変化やいじめられた時の援助要請に関する調査を行い、いじめの状況を把握することを目的とする。またその際、いじめた場合も合わせて調査する。研究 II では、過去のいじめの影響を長期的に捉えた上で、いじめの影響が大学生である現在の援助要請にどのような影

響を与えるかについて明らかにすることを目的とする。

2. 研究 I

2-1. 目的

研究 I では、大学生を対象に、過去のいじめ経験における実態の把握、及びいじめられた後の体調変化やいじめられた時の援助要請に関する調査を行った。

2-2. 方法

1) 調査期間

2015 年 9 月から 12 月

2) 調査対象

A 大学の学生 117 名 (男性：31 名，女性：86 名)

3) 倫理的配慮

いじめに関する調査時には、調査への参加は自由意志であること、無記名回答とすることにより個人の匿名性は守られること、得られた回答は本調査以外には使用しないことを、紙面 (フェイスシート) 及び口頭で説明した。質問紙は、調査対象者が回答終了後、その場で回収した。

4) 調査内容

①いじめられた経験は、1) ない 2) ある の 2 件法で回答する。

②いじめられた経験の時期は、1) 小学校、2) 中学校、3) 高校、4) 大学、の中から複数を選択する。

③いじめられた内容は、1) 暴力、2) いやがらせ、3) 仲間はずれ、4) 脅しや命令、5) その他 (具体的な内容を記載)、の中から複数を選択する。

④いじめられた経験後の体調は、1) 大した影響は受けず、体調にも特に変化は起きなかった、2) つらかったが、それほど体調が悪くなるようなことはなかった、3) つらくて、時々 (1 週間くらい) 体調が悪くなることがあった、4) とてつらくて、長い間 (1 週間かそれ以上) 体調が悪くなることがあった、の中から 1 つ選択する。

⑤いじめられた時の援助要請は、1) 何もしないでいじめられるままになっていた、2) 家族に相談した、3) 先生に相談した、4) 友人に相談した、5) カウンセラーや相談員に相談した、6) 自分だけで反撃した、7) 逃げたり学校を休んだりした、8) その他

(相談者を記載)の中から複数を選択させた。

⑥いじめた経験は、1) ない 2) ある の2件法で回答させた。

⑦いじめた経験の時期は、1) 小学校、2) 中学校、3) 高校、4) 大学、の中から複数を選択する。

⑧いじめた内容は、1) 暴力、2) いやがらせ、3) 仲間はずれ、4) 脅しや命令、5) その他(具体的な内容を記載)、の中から複数を選択する。

なお、上記の質問内容については、坂西(1995)を参考に作成した。質問紙の内容は、資料①を参照のこと。

2-3. 結果と考察

①いじめられた経験は、117名中67名(57%)があると回答し、約6割が経験していることが示された。

②いじめられた経験(67名を対象)の時期は、小学校(59%)、中学校(48%)、高校(9%)、大学(2%)で、小学校から中学校にかけて多かった。

③いじめられた内容は、経験があった67名全員が回答した(全105回答)。内訳は3) 42%、2) 38%、1) 6%、4) 7%、5) 2%の順で、「3) 仲間はずれ」と「2) いやがらせ」が特に多かった。

④いじめられた経験後の体調は、67名中66名(99%)が回答した。内訳は2) 47%、1) 35%、3) 12%、4) 8%の順で多かった。2) や1)の体調まで悪くならない者が半数近くいたが、3) や4)の心身に悪影響があった者は合わせて2割いることが示された。

⑤いじめられた時の援助要請は、3) と4) が各々18%、2) 16%、1) 15%、6) 12%、8) 9%、7) 6%、5) 3%の順で多かった。先生・友人・家族に求めた割合が比較的高かったが、各々が2割に満たなかった。また、1)、6)、7)のように援助要請をしていない者も1割以上いることが示された。

⑥いじめた経験は、117名中46名(39%)があると回答し、約4割がいじめた経験をもつことが示された。

⑦いじめた経験(46名を対象)の時期は、小学校(74%)、中学校(28%)、高校(4%)、大学(2%)で、小学校から中学校にかけて多かった。

⑧いじめた内容は、経験があったとした内45名

(99%)が回答した(全61回答)。内訳は3) 52%、2) 31%、1) 7%、4) 7%、5) 3%の順で、「3) 仲間はずれ」と「2) いやがらせ」が特に多かった。

以上より、いじめられた経験は6割、いじめた経験は4割と比較的高く、いじめられて体調を崩した者は2割いた。しかし、援助要請に関する回答の中には、いじめられるままになっていた者が15%いることが示された。そこで研究Ⅱでは、過去のいじめの影響を長期的に捉えた上で、大学生である現在の援助要請に与える影響性について検討する。

3. 研究Ⅱ

3-1. 目的

研究Ⅱでは、大学生を対象に、過去のいじめ経験を振り返り、それらのいじめの影響が現在の援助要請スタイルにどのような影響を及ぼすかについて検討することを目的とする。

3-2. 方法

1) 調査期間・調査対象・倫理的配慮

研究Ⅰを参照のこと。

2) 調査内容

①いじめの影響：いじめの影響尺度(42項目：香取、1999)。本尺度は、いじめの否定的な影響として、情緒的不適応(15項目)、同調傾向(7項目)、他者評価への過敏(5項目)、肯定的な影響として、他者尊重(8項目)、精神的強さ(5項目)、進路選択への影響(2項目)、の6下位尺度から構成されている(資料②)。評定は、1. 全くそう思わない、2. そう思わない、3. そう思う、4. 全くそう思う(4件法)であった。

なお、過去のいじめを振り返る際には、いじめ経験についても個人のスタイルとして捉えるため、いじめ経験を「いじめられること・いじめたこと・いじめを見ること」として、個人が想起するいじめ経験が限定されないように、教示文を工夫した。

②現在の援助要請：援助要請スタイル尺度(12項目：永井、2013)を用いた(資料③)。本尺度は、援助要請自立型(4項目)、援助要請回避型(4項目)、援助要請過剰型(4項目)、の3下位尺度から構成されている。評定は、1. あてはまらない、2. あま

りあてはまらない, 3. 少しあてはまる, 4. あてはまる (4 件法) であった。

3-3. 結果と考察

1. 確認的因子分析

1) いじめの影響尺度を因子分析 (最尤法・*promax* 回転) した結果, 想定通り 6 因子 ($\alpha=.68 \sim .87$) が見いだされた。本尺度の各下位尺度の M (SD) は, 他者尊重 (3.09 (.49)), 他者評価への過敏 (2.75 (.66)), 精神的強さ (2.70 (.58)), 同調傾向 (2.42 (.59)), 情緒的不適応 (1.96 (.49)), 進路選択への影響 (1.74 (.75)) の順であった。

2) 援助要請スタイル尺度を因子分析 (最尤法・*promax* 回転) した結果, 想定通り 3 因子 ($\alpha=.72 \sim .91$) が見いだされた。本尺度の各下位尺度の M (SD) は, 自立型 (2.77 (.60)), 回避型 (2.08 (.77)), 過剰型 (1.32 (.45)) の順であった。

1), 2) の各尺度を用いる際は, 先行研究通りの因子構造及び各下位尺度項目を基として, それらの各下位尺度の合計得点を項目数で割り, 平均値を算出した上で用いた (Table 1)。

2. 男女差

いじめの影響尺度と援助要請スタイル尺度の各下位尺度に男女差がみられるかを検討するため, t 検定を行った。その結果, いじめの影響尺度の下位尺度には有意な差はなかった。しかし, 援助要請スタイル尺度の下位尺度である援助要請回避型の尺度得点において, 女性よりも男性の方が有意に高い値が

示された ($t(115) = 2.67, p < .05$)。男性は, 回避的な援助要請行動を選択すること (石黒・榎本・山上・藤岡, 2016; 木村・濱野, 2010), 女性は援助要請を肯定的にとらえ, 援助要請行動をとりやすいこと (山口・西川, 1991) 等の知見が, 本研究の結果に関係している可能性が示唆される。

3. 相関分析

いじめの影響尺度と援助要請スタイル尺度の各下位尺度との相関分析を行ったところ, いじめの否定的な影響の「情緒的不適応」は援助要請の回避型 ($r=.19 (p < .05)$), 「他者評価への過敏」は過剰型 ($r=.25 (p < .01)$), 肯定的な影響の「他者尊重」は自立型 ($r=.26 (p < .01)$), 回避型 ($r=-.19 (p < .05)$), 過剰型 ($r=.30 (p < .01)$) との間にそれぞれ有意な相関があった (Table 2)。

4. 重回帰分析

いじめの影響尺度の各下位尺度を独立変数, 援助要請スタイル尺度の各下位尺度を従属変数とする重回帰分析を行った。重決定係数は全ての影響において有意 ($R^2=.11 \sim .15 (p < .05; p < .01)$) であった。いじめの否定的な影響である「情緒的不適応」は援助要請回避型 ($\beta=.29, p < .05$), 肯定的な影響である「他者尊重」は自立型 ($\beta=.36 (p < .01)$) と過敏型 ($\beta=.29 (p < .05)$) にそれぞれ有意な正の影響があった (Table 3)。これらの結果から, 過去のいじめ経験における否定的な影響は, 援助を要請する際の回避型に影響する一方, 肯定的な影響は, 援助を要請する際の自立型と過敏型の両側面への影響性が示された。

Table 1 各尺度得点の α 係数, 全体および男女別平均値と標準偏差

	α 係数	全体 (N=117)		男性 (N=31)		女性 (N=86)		t 値
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
いじめの影響								
情緒的不適応	.87	1.96	.49	2.02	.43	1.94	.51	0.71
同調傾向	.82	2.42	.59	2.44	.53	2.42	.61	0.14
他者評価への過敏	.79	2.75	.66	2.66	.63	2.77	.67	-0.92
他者尊重	.85	3.09	.49	2.97	.57	3.14	.45	-1.70
精神的強さ	.68	2.70	.58	2.64	.66	2.72	.56	-0.51
進路選択への影響	.77	1.74	.75	1.85	.89	1.70	.69	1.00
援助要請スタイル								
援助要請自立型	.72	2.77	.60	2.71	.65	2.80	.58	-0.69
援助要請回避型	.89	2.08	.77	2.43	.88	1.96	.69	2.67*
援助要請過剰型	.91	1.32	.45	1.06	.38	1.41	.44	-4.00

* は 5% 水準で有意を示す。

Table 2 いじめの影響と援助要請スタイルとの相関係数

いじめの影響	援助要請スタイル		
	援助要請自立型	援助要請回避型	援助要請過剰型
情緒的不適応	-.10	.19*	.03
同調傾向	-.05	-.01	.09
他者評価への過敏	-.01	-.12	.25**
他者尊重	.26**	-.19*	.30**
精神的強さ	.13	.00	.09
進路選択への影響	-.10	.16	.01

** は 1%, * は 5%水準で有意を示す.

Table 3 いじめの影響が現在の援助要請に及ぼす影響性

いじめの影響	援助要請スタイル		
	援助要請自立型	援助要請回避型	援助要請過剰型
情緒的不適応	-.01	.29*	-.05
同調傾向	-.05	.03	-.14
他者評価への過敏	-.09	-.26	.28
他者尊重	.36**	-.24	.29*
精神的強さ	-.03	.17	-.12
進路選択への影響	-.14	.13	.06
重決定係数	.11*	.15**	.13*

** は 1%, * は 5%水準で有意を示す.

4. 総合考察

研究 I では、過去のいじめ経験を振り返り、当時のいじめ状況と援助要請との関係について調査した。その結果、いじめられた経験は全体で 6 割、いじめた経験は 4 割と比較的高く、いじめられた経験がある者の中で、いじめられて体調を崩した者は 2 割いることが明らかになった。また、いじめられた経験がある者について、援助要請を行わなかった者が 15%いることが示された。木村・濱野 (2010) は、いじめ被害にあったときの援助要請を抑制する要因として、「プライドの高さ」や「恥ずかしさ」、「いじめられていることを認めたくない」等、自尊感情の低下を避ける理由が含まれていることを指摘している。したがって、いじめられた際に自尊感情が低下しやすい相手に対しては、適切な援助要請を促す要因 (例：友人からのソーシャル・サポート (永井, 2016) 等) との関連を検討し、かかわり方を工夫する必要があると考える。

研究 II では、過去のいじめの影響を長期的に捉え

た上で、いじめの影響が大学生である現在の援助要請にどのような影響を及ぼすかについて検討を行った。その結果、援助要請スタイル尺度の下位尺度である援助要請回避型の尺度得点において、女性よりも男性の方が有意に高い値が示された。また、重回帰分析を行った結果、いじめの否定的な影響である「情緒的不適応」は援助要請回避型、及び肯定的な影響である「他者尊重」は援助要請自立型と過剰型にそれぞれ有意な正の影響を与えることが示された。青柳 (2016) は、援助要請自立群では自分への信頼が高まると他者への不信が低下する一方、過剰群では自分への信頼が高まると他者への信頼が高まることを指摘している。また、過剰型は情緒的サポート (例：あなたが落ち込んでいるときに励ましてくれる等) を多く知覚することによって、自分への信頼が高まる可能性を示唆している。この知見から推測すると、本研究で見いだされたいじめの肯定的な影響である「他者尊重」が援助要請自立型と過剰型の両側面に有意な正の影響を与えたという結果は、情緒的なサポート等によって他者に対して尊重する

感情が喚起され、より援助を要請しようとする意識が高まったためではないかと推察する。

5. 今後の課題

今後の課題として、以下の2点が挙げられる。

研究Ⅰの課題としては、いじめられた際、誰に(例：家族に相談した、先生に相談した、友人に相談した、カウンセラーや相談員に相談した)援助を要請したかによって、その援助要請がいじめの解決につながったかどうかを検討することである。坂西(1995)は、他者に援助を求めることといじめの解消に関する検討を行い、いじめの解消には友人、家族、先生に援助を求めることが有効であり、特に友人に援助を求めることがいじめ事態の改善につながることを指摘している。このことから今後は、いじめられた際、誰にどのような援助要請を行うことが、いじめの解消につながるかについて、インタビュー調査等を用いて検討したい。また、誰に援助を要請したかという点だけではなく、なぜ援助を要請しなかったか、及びできなかったかという点についても詳細に検討したい。

研究Ⅱの課題としては、過去のいじめの影響が援助要請スタイルの各下位尺度に及ぼす影響性に違いが示されたことから、援助要請を促進する要因や抑制する要因をより詳細に検討することである。永井(2016)は、大学生の友人関係のタイプを4群に分けて検討した結果、友人関係回避群では、学校適応感や友人からのソーシャル・サポートの受容が低いことを明らかにしている。このことから、援助要請を規定する要因として、自尊感情(木村・濱野, 2010)や友人からのソーシャル・サポートの程度(永井, 2016)が関連している可能性も示されているため、今後は援助要請を規定する要因についても詳細に検討したい。

付記

本研究は、日本カウンセリング学会第50回記念大会で発表した内容を加筆・修正しました。本研究の調査にご協力頂きました学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 青柳美美(2016). 大学生の信頼感と援助要請スタイル別ソーシャルサポートとの関連性 九州大学心理学研究, 17, 63-68.
- 坂西友秀(1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- DePaulo, B. M. (1983). Perspectives on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher (Eds.), *New directions in helping. Vol. 2 Help-seeking*. New York: Academic Press. pp. 3-12.
- 深谷昌志・深谷和子監修(2003). 『いじめ』の残したもののモノグラフ・小学生ナウ, VOL. 23-2 (ベネッセ未来教育センター)
- 石黒良和・榎本玲子・山上精次・藤岡新治(2016). 援助要請と生活適応感の関連性：自尊感情と他者軽視の観点から 専修人間科学論集 心理学篇, 6, 31-40.
- 香取早苗(1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, 32, 1-13.
- 木村真人・濱野晋吾(2010). いじめ被害における援助要請行動を抑制する要因の検討 東京成徳短期大学紀要, 43, 1-12.
- 文部科学省(2016). 平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値)について(2017年10月26日)
- 永井 智(2013). 援助要請スタイル尺度の作成：縦断調査による実際の援助要請行動との関連から 教育心理学研究, 61, 44-55.
- 永井 暁行(2016). 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連 教育心理学研究, 64, 199-211.
- 中桐佐智子・岡本陽子・澤田和子(2008). いじめを受けた時の自覚症状と対処行動に関する研究 吉備国際大学保健科学部紀要, 13, 27-34.
- 山口智子・西川正之(1991). 援助要請行動に及ぼす援助者の性、要請者の性、対人魅力、および自尊心の影響について 大阪教育大学紀要, 40, 21-28.

資料

資料①：過去のいじめ経験に関する質問内容

1. あなたは小学校から今までに、いじめられた(被害者)経験はありますか？

以下のあてはまる番号一つを選んで、○で囲んでください。

- 1) ない ➡ 質問 2.からお答えください
- 2) ある ➡ 以下にお答えください

1-2. いじめられた時期や学年(年齢)はいつ頃ですか？

あなたが最も印象に残っているいじめられた体験について、

以下の時期にあてはまる番号一つを選んで、○で囲んでください。

また、その時期の学年(年齢)もわかる範囲で記入してください。

- 1) 小学校 学年(年齢): _____
- 2) 中学校 学年(年齢): _____
- 3) 高校 学年(年齢): _____
- 4) 大学 学年(年齢): _____

1-3. いじめられた内容(方法)は主にどのようなものでしたか？

以下の内容(方法)にあてはまる番号すべてを○で囲んでください。

※ 5)その他を選択した場合には、その内容をわかる範囲で記入してください。

- 1) 暴力(身体的暴力・持っているものを壊されるなど)
- 2) いやがらせ(ことばでの冷やかしたり悪口、しつこいふざけなど)
- 3) 仲間はずれ(無視・口をきかない・きたながるなど)
- 4) 脅しや命令(使い走り・嫌なことをやらされるなど)
- 5) その他(内容: _____)

1-4. いじめられた時、そのいじめに対して主にどのように対処をしましたか？

以下の対処にあてはまる番号すべてを○で囲んでください。

※ 8)その他を選択した場合には、その内容をわかる範囲で記入してください。

- 1) 何もしないでいじめられるままになっていた
- 2) 家族に相談した
- 3) 先生に相談した
- 4) 友人に相談した
- 5) カウンセラーや相談員に相談した
- 6) 自分だけで反撃した
- 7) 逃げたり学校を休んだりした
- 8) その他(内容: _____)

1-5. 1-4.のいじめへの対処の結果、どのように変化しましたか？

以下の項目にあてはまる番号一つを選んで、○で囲んでください。

- 1) 前よりひどくなった 2) 変わらなかった
- 3) 少しよくなった 4) かなりよくなった
- 5) 全くなくなった

1-5. いじめられた体験後、何らかの体調の変化はありましたか？

以下の項目にあてはまる番号一つを選んで、○で囲んでください。

- 1) 大した影響は受けず、体調にも時に変化は起きなかった
- 2) つらかったが、それほど体調が悪くなるようなことはなかった
- 3) つらくて、時々（1週間くらい）体調が悪くなることがあった
- 4) とてもつらくて、長い間（1週間かそれ以上）体調が悪くなることがあった

2. あなたは小学校から今までに、いじめた（加害者）経験はありますか？

あなたが最も印象に残っているいじめた経験について、

以下のあてはまる番号一つを選んで、○で囲んでください。

- 1) ない ➡ 3.いじめに関する質問にお答えください
- 2) ある ➡ 以下にお答えください

2-1. いじめたのはいつですか？

あなたが最も印象に残っているいじめた経験について、

以下の時期にあてはまる番号一つを選んで、○で囲んでください。

また、その時期のあなたの学年（年齢）もわかる範囲で記入してください。

- 1) 小学校 学年（年齢）： _____
- 2) 中学校 学年（年齢）： _____
- 3) 高校 学年（年齢）： _____
- 4) 大学 学年（年齢）： _____

2-2. いじめた内容（方法）は、主にどのようなものでしたか？

以下の内容（方法）にあてはまる番号すべてを○で囲んでください。

※ 5)その他を選択した場合には、その内容をわかる範囲で記入してください。

- 1) 暴力（身体的暴力・持っているものを壊されるなど）
- 2) いやがらせ（ことばでの冷やかしか悪口、しつこいふざけなど）
- 3) 仲間はずれ（無視・口をきかない・きたながるなど）
- 4) 脅しや命令（使い走り・嫌なことをやらされるなど）
- 5) その他（内容： _____)

3. いじめ（いじめられること、いじめること、いじめを見ること）を通して、自分が変わったと思うことについてお聞きします。

以下の項目から、あなたの考えに最もあてはまると思う数字一つを選んで、○で囲んでください。

※ 以下には、いじめの影響尺度（香取,1999）への回答を求めた。

資料②: いじめの影響尺度 (香取, 1999) の項目内容

情緒的不適応 (15項目)

体に不調を感じるようになった
何もしたくないと思うようになった
物事を否定的に考えてしまうようになった
イライラしやすくなった
自分はダメな人間だと思うようになった
いじめの夢を見るようになった
いじめを思い出させるようなことを避けるようになった
一人でいる方が楽だと思うようになった
よく眠れなくなった
自分を支えてくれる人はいないと思うようになった
怒りっぽくなった
いじめ体験を思い出し、憂うつになるようになった
警戒心が強くなった
自分は無力だと感じるようになった
誰にも親しみの感情がわかなくなった

同調傾向 (7項目)

相手の考えや意見に合わせるようになった
自分の考えや意見を言うのを抑えるようになった
目立たないようにしようと思うようになった
あたりさわりのないよう人と付き合うようになった
人と違ったことはしないでおこうと思うようになった
自分が不利になりそうなことには関わりたくないと思うようになった
みんなと同じようにしようと思うようになった

他者評価への過敏 (5項目)

人と常に親密な関係でいたいと思うようになった
人からどのように思われているのか気になるようになった
嫌われないように人に気をつかうようになった
誰かと一緒にいないと不安になるようになった
人の態度に過敏になった

他者尊重 (8項目)

人に思いやりを持って接するようになった
相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べるようになった
人の心の痛みが分かるようになった
自分の気持ちや考えを相手に適切に伝える努力をするようになった
相手の意見も尊重しながら自分の意見を述べるようになった
自分がされて嫌なことは人にしなくなった
友人を大切にしようと思うようになった
困っている人を助けたいと思うようになった

精神的強さ (5項目)

自分の人生を切り開いていく自信がついた
我慢強くなった
人に負けたくないと思うようになった
精神的に強くなった
人間的に成長した

進路選択への影響 (2項目)

将来の職業選択に影響を与えた
大学等の志望学部に影響を与えた

資料③: 援助要請スタイル尺度(永井, 2013)の項目内容

援助要請自立型(4項目)

- 先に自分で、いろいろとやってみてから相談する
 - 相談よりも先に自分で試行錯誤し、いきづまったら相談する
 - 少しづらくても、自分で悩みに向き合い、それでも無理だったら相談する
 - 悩みが自分一人の力ではどうしようもなかった時は、相談する
-

援助要請回避型(4項目)

- 悩みが深刻で、一人では解決できなくても、相談はしない
 - 悩みは最後まで、自分一人でかかえる
 - 悩みがどのようなものでも、最後まで自分一人でがんばる
 - 悩みが自分では解決できないようなものでも、相談しない
-

援助要請過剰型(4項目)

- 比較的ささいな悩みでも、相談する
 - 困ったことがあったら、わりとすぐに相談する
 - よく考えれば大したことないと思えるようなことでも、わりと相談する
 - 悩みを抱えたら、それがあまり深刻なものでもなくとも、相談する
-

Abstract

Study on Request for Support of University Students: Focusing on the Influence of Past Bullying Experience

Koichi KANEKO

Faculty of Child Development and Education , Uekusa Gakuen University

In this research, a questionnaire survey on past bullying experience was conducted on 117 university students (male: 31; female: 86). In Study I, we reviewed past bullying experiences and investigated the relationship between bullying circumstances at that time and request for assistance. Results showed the rate of those who had been bullied to be relatively high at 60% while that of individuals who ha bullied others to also be relatively high at 40%, and it was clear that among those who had been bullied, 20% experienced negative health effects as a result. In addition, of those who had been bullied it was shown that 15% did not request aid. Therefore, in Research II, we examined the influence of past bullying in the long term and examined how the influence of past bullying affected current university student help-seeking behavior. Results suggested that the negative effect of bullying, “emotional maladjustment,” influences the help-seeking avoidance type behavior, while the positive effect, “respect for others,” is a significant positive influence on both help-seeking autonomous type behavior and excessive type behavior.

Keywords: past bullying experience, university student, influence of bullying, help-seeking

